

10) 仏師と入歯師

Buddhist Sculptors and Denturists

日本歯科大学歯学部 新藤恵久

Yoshihisa Shindo, *The Nippon Dental University School of Dentistry at Tokyo*

木彫はわが国だけに栄えた彫刻であった。これを支えたのがわが国の金属器の優秀さであった。平安初期ににわかにならわれた木彫仏は、優秀な彫刻器具の完成を示している。

平安中期に完成した内割りの技法からわが国独自の木床義歯が生まれた。

15世紀に作られた仏姫使用の上顎木床義歯は、その洗練された完成度より、義歯制作に秀でた仏師か、入歯師の作と考えられる。

仏姫の義歯のホンツゲの産地は限定されており、この入手は中世からの流通機構の発達によるものと考えられる。

鎌倉時代の農業の進歩は、手工業の発達をうながし、町には定期市が開かれ、物や情報交換の場となった。仏師の手慰みから生まれた木床義歯の技術も畿内から全国に普及したものと思われる。そして中世独自の経済組織である座…利益の独占と排他を目的とする…は、この市の制度によって助長された。

中世に成立した座（本座）は、南北朝の内乱後からは、新座がつくられ自由に活動するようになった。

新座は、農村にも市を中心として種々の座を生んだ。この新座のなかの売薬、歯抜き業者のなかに入歯作りをするものが登場し、この生業を独占するようになった。

一方仏師は、豊臣時代、秀吉の命で造仏の名工・法印宗貞・法眼宗印の兄弟が十六丈の大木仏像を方廣寺に安置した。仏師に権威があったのはこの頃まで、江戸時代になると、将軍秀忠は天下に令して戸毎に仏像を安置するよう令した。以来仏工は

短尺の仏像を造るようになった。「小像ヲ造ルモ往古ノ佛工ニ及ハサルニ至レリ」と記されている。

戦国大名は、門前市場や諸座に保護を加え、統制するとともに、新たに城下町や商人頭や職人頭を中心とする座を結成させた。この頃より江戸時代にかけて、木床義歯制作の権利は入歯師の独占となったと考える。

「嘉納家文書」の寛政10年の項に、仏師で入歯師の三蔵の名があるが、これは入歯師のなかに仏像も作った者があるということで、当時の仏師には座も呼称の制限も無く、大仏師と自称しても以前のものとは全く異なり、何らの権威を持つものではなかった。

江戸時代の入歯師には、須田一族の詳細な記録が残っている。初代須田松兵衛は、もとは松五郎という武蔵国飯能村の川越人夫、天保の頃、八王子宿にやってきて、売薬と入歯作りを始める。入歯作りは飯能あたりの香具師から習ったのではないかという。身分は低いが才覚のある男で、ある時、市場で古い農用種子を売って悪評を広げ、翌年にはこの客に種子を無代で進呈して宣伝したり、江戸で「八王子炭焼三太郎」の滑稽本が出版されると、「三太郎薬」の名の薬を売り、又心学がブームとなると「心学いろはかるた」なる本を刊行して、当時の身分制度に挑戦したり自らの才能を誇示した。富をなして隠居すると一家の繁栄ぶりを絵師に描かせたが、これは当時の入歯師の状況を知る貴重な資料となった。

一方、仏師の弟子であった高村光雲作の上野の西郷隆盛像からは、かつての大仏師を想起させるものは無い。